

## 令和4年度 埼玉県高等学校新人大会総評

高体連サッカー専門部技術部員 細田学園高校 上田健爾

### 1. 大会概要

2023年2月11日から2月19日に選手権ベスト8校（昌平・成徳深谷・埼玉栄・浦和学院・立教新座・細田学園・狭山ヶ丘・武蔵越生）と各支部予選1位・2位（正智深谷・早大本庄・武南・市立浦和・西武台・聖望学園・花咲徳栄・春日部東）計16校にて、ノックアウト方式のトーナメントで開催された。今大会では、入場のセレモニーが復活し、また各会場の許される範囲で観戦が認められるなど、声出し応援はなしではあったが、少しずつではあるが活気が戻ってきた大会となった。

1回戦は前日の雪の影響で試合開始時間を変更することになったが、各校の協力のおかげで大会は無事遂行された。優勝は武南高校、準優勝武蔵越生高校、3位に昌平高校と成徳深谷高校という結果で閉幕した。

### 2. 大会傾向

シーズンのスタートの大会ということもあり、各チームメンバーを固定せず、多くの選手を出場させ、経験を踏ませているように感じた。

各高校、攻撃の連携にはまだまだ課題があり、個人の特徴で勝負するシーンが多くみられた。その中で、武南高校は連携に長けており、これが優勝に輝いた大きな要因の1つとなった。ベスト4に勝ち上がったチームは、この個の勝負に対して、突破を簡単に許さない守備力を持っているチームが勝ち上がった。

また、得点はセットプレーでの得点が多く見られた。決勝に進出した2校は、セットプレーの攻撃がデザインされていて、且つキッカーのクオリティの高さを持っていたチームである。この時期からセットプレーの攻撃をしっかりとデザインしてきたチームは流石と感じた。一方、セットプレーの守備においては多くのチームで課題が残った。

### 3. 決勝進出高校分析

#### 1) 武南高校

基本的なシステムは1-4-2-3-1の布陣。ボール保持時には両サイドバックが高いポジションを取り、比較的近い距離でテンポの良いパスワークと個人のテクニックでボール保持する。特に、ボランチの2人はゲームを読む力や展開力に優れ、試合をコントロールしていた。アタッキングサードでは、近い距離を保ちボール保持をしながら相手を密集させ、サイドの素早い選手が突破しチャンスメイクをする。準決勝・決勝は前線の選手を変えていたが、クオリティは落ちず層の厚さを感じた。また、今大会では、セットプレーからの得点が多く、その要因としてはキッカーのクオリティの高さがあげられる。

ボールを失った瞬間では、攻撃時に距離が近いので、素早い切り替えからの奪い返しを可能にしていた。また、相手のロングフィールドに対しては、身体能力に長けた両 CB が、空中戦やボールホルダーに対して強さを発揮し、相手の攻撃を跳ね返した。

また、準決勝の昌平高校戦では、後半途中から 1-3-5-2 の布陣に変更し、中央の人数を増やし好機を狙うシーンもあり、可変性も見受けられた。

## 2) 武蔵越生高校

基本的なシステムは 1-4-3-3 の布陣で、前線の 3 枚の FW が 1 つになって動き、そこに素早く配球していき、セカンドボールや連携で相手ゴールに迫る。高い位置で起点ができれば、ボランチもしくはサイドバックが攻撃に加わりクロスを狙う。守備時にも、前線の 3 人は残り、カウンター攻撃に備える。その 3 人残しが相手ディフェンダーの攻撃参加をしづらくさせ、相手に分厚い攻撃を許さない駆け引きをしている。

守備時は、ディフェンスラインの間を 3 ボランチが埋め、中央へ侵入を許さないように立ち、外に誘導していく。相手のクロスボールに対しては、高さのあるセンターバックとゴールキーパーが集中した守備で相手のチャンスを阻む。

また、セットプレーの攻撃がデザインされており、ダブルスルーやファーからの折り返しなどいくつかのバリエーションでチャンスを演出していた。

## 4. 終わりに

前日の雪の影響で試合開始時間が変更された初戦。会場校の多大なる準備によって開催にいたったこと。また、試合前にも関わらず、登録メンバーも雪かきを手伝って下さったチーム、誠に感謝申し上げます。

シーズンスタートの大会ともあって、各チーム課題が抽出され、現在地が把握できた大会となった。この大会を期にさらなる成長を期待したい。